

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース② *

谷口 和久

●ジロ・ディ・イタリア 記念すべき第一歩

ミラノ中央駅から東に1キロほど、ロレート円形広場“Rondò di Loreto”と呼ばれた比較的大きな交差点がある。現在はロレート広場“Piazzale Loreto”と改名されているが、かつての名称“Rondò”(「円形広場」以外に「ロータリー」という意もあり)が示すとおり、四方八方に道の伸びる交通の要所である。ミラノでも中央駅の周辺はあまり治安が良くない場所と言われており、3年ほど前に筆者は偶然この広場を通りかかったことがあるが、ちょうど朝市が開かれていて、並んでいる電化製品や衣類のバツ物ぶり、それに露天商たちの目つきから「泥棒市」的な、(ナポリほどではないにせよ)ただならぬ印象を受けた。

ところで、このロレート広場では第二次大戦末期の1945年、独裁者ムッソリーニが彼の愛人とともに、憎しみに満ち満ちた市民の手によって、見せしめのためその死骸を逆さ吊りにされた場所として、その名を後世にとどめることになった陰惨な場所であるが、ここで語るのももちろんムッソリーニの生涯でも泥棒市の話でもない。

時はムッソリーニの逆さ吊りからさかのぼること36年前の1909年5月13日。早期、というよりまだ深夜といったほうがふさわしい午前2時53分、このロレート円形広場から記念すべき第一回ジロ・ディ・イタリア“Giro d’Italia”(以下「ジロ」)の幕が切って落とされた。参加選手は127人。127人の行く手には、イタリア一周2500キロに渡る過酷なコースが待ち構えていたのである。

●きっかけは新聞社の販促競争

話はさらに1年前にさかのぼる。イタリアのスポーツ新聞ラ・ガゼッタ・デッロ・スポルトウ“La Gazzetta dello Sport”(以下「ガゼッタ」)の1908年8月7日号の一面に、第一回ジロの告知が掲載された。これは、ライバル紙コッリエーレ・デッラ・セーラ“Corriere della Sera”が、すでに自動車によるイタリア一周レースを開催していたのに対抗して、ガゼッタの編集長トゥロ・モルガーニが発案したものである。隣国フランスでは、すでにかの地のスポーツ紙ロトがフランス一周自転車レース、ツール・ド・フランス“Tour de France”を立ち上げ、成功させていた。



【ガゼッタ紙(写真は現在のもの)】

元々、世の中で起こっている事件を取り上げるところから始まったジャーナリズムも、そのうち自ら大衆の耳目を惹きつけるイベントを企画・開催し、

読者獲得を図っていったのである。日本でも同じような図式で、たとえば朝日新聞と毎日新聞が高校野球を競って開催したり、読売新聞が自らの野球チームを起こしたりしたことはみなさんご存知の通り。

話はそれるが、日本でもジロに先立つこと1898年(明治31年)に初めての自転車レースが東京・上野で開催され、参加者数も第1回ジロの4倍ちかい500人と大規模なものであったが、残念ながらその後、日本で自転車レースが定着しなかったのは、ジャーナリズムとの連携が図られなかったこととも無縁ではないだろう。



【第一回ジロのコース概略図】

自転車レースの中でも、ツール・ド・フランスやジロは「ステージ・レース“Corsa a tappe”」と呼ばれる。これは何日間にも渡って、町から町へレースが渡り歩くもので、当然日程が長いほど、毎日の結果はもちろんのこと、道中さまざまなドラマやトラブルが発生し、それがますます読者の興味・関心を煽ったのである。

ガゼッタの一面告知を受けて、アタラ“Atala”やビアンキ“Bianchi”といったチームが参戦した。アタラもビアンキも、当時のイタリアにおける第一線の自転車メーカーであり、彼らは自社製品の販促を目的に、自らのチームを立ち上げていた。ビアンキは今なおイタリアのナショナル・ブランドとして、その空色“Celeste”のシンボルカラーとともに

世界的に知られる自転車メーカーである。ちなみに前号で紹介したファウスト・コッピが駆っていた自転車もビアンキ製である。アタラも、一時は経営危機に陥ったものの、今でもシティ・サイクルを主体としたメーカーとして生き残っている。

マスメディアの拡張、自転車メーカーによる機材競争、そして「個」の競争を求める大衆社会の勃興、これらが三位一体となってジロをはじめとする自転車競技(ひいてはスポーツ全般)が広まっていったのである。

●非人道的コース設定

第一回のジロは走行距離2448キロを8日間に分けて行われた。なんと1日あたりの走行距離は平均300キロを超えたのである。ちなみに、現在のプロ・ロードレースで最長のものは、毎年3月に行われる「ミラノ・サンレモ(文字通りミラノからリグーリアのサンレモまでのコース)」の298キロ。ただし、これは1日で終わる「ワンデー・レース“Corsa di un solo giorno”」と呼ばれるものであり、何日間にも渡るステージ・レースでは1日あたりの距離はより短く設定されるのが通例である。当然ながら当時は路面状況も悪く、自転車も現在のようにカーボン製の軽量フレームなどももちろんなく、重い鉄製のフレームで、しかも当時はまだ変速機もなかったので、登りでも固定された重いギアで登らねばならなかったのである。第一回ジロのコースは次の通り。

- ・1日目:ミラノ→ボローニャ
- ・2日目:ボローニャ→キエーティ
- ・3日目:キエーティ→ナポリ
- ・4日目:ナポリ→ローマ
- ・5日目:ローマ→フィレンツェ
- ・6日目:フィレンツェ→ジェノヴァ
- ・7日目:ジェノヴァ→トリノ
- ・8日目:トリノ→ミラノ

これらの8ステージに渡るレースは連日行われたのではなく、あいだに休息日をはさみながら行われた。これは、1日300キロという殺人的コースレイアウトに配慮したというより、むしろガゼッタ紙の発行が当時は週3回であったので、その発行日にあわせてスケジュールを組んだ、といったと

ころが真因らしい。現在でも多くのスポーツ競技がテレビの放映時間によって競技時間が振り回されているが、それは100年前から変わらないということだ。まあ、選手からしてみれば、「それくらい休みがなければ、やってられん」といったわけで、「これ幸い」であったに違いない。

さて、ミラノのロレート広場をスタートした一行であったが、いきなり最初の通りで集団落車が発生。ここで、ツールを連覇して優勝候補の筆頭に上げられていたフランス人選手プティブルトンが落車に巻き込まれ、自転車修理のため3時間も遅れる羽目になった。当時はチームによるサポートは認められておらず、選手は自ら予備タイヤや工具を抱えて走り、修理も自分でしなければならなかったのである。

●初代勝者は左官屋さん

8日間のレースを走り切り、5月30日に最終ゴールのミラノにたどり着いたのは、参加127人中、49人。完走率は38%と、現代のレースから見ても相当過酷なもので、「スポーツ競技」というよりもむしろ「サバイバルレース」といった方がふさわしいものであった。

優勝は左官屋のルイーダ・ガンナ。ただ、その優勝への道のりは必ずしも平坦なものではなかった。第1ステージではゴールのボローニャ・ザッポリ競技場にトップで入ってきたものの競技場内でまさかの転倒、態勢を立て直す間に後続に抜かれてしまい4位に終わる。続く第2ステージではゴール直前のカーブでコースミスしてこれまた後続に抜かれ、アペニン山脈を越える第3ステージでもいいところなし。しかしながらフィレンツェのゴールではスプリントを制し、トリノには単独でゴールに飛び込んだ。最終日の時点で、ガンナは総合ポイントでトップに立っていたものの、後続との差は磐石と言えるものではなかった。その最終ステージ、ゴールまで75キロを残す地点でガンナがまたまたパンク。その間にライバルたちにタ

イムを奪われたが、第4ステージ以降のポイントをキープし総合優勝に輝いた。そして、賞金5千リラと、ジロの総合優勝者リストの筆頭にその名を留めるといふ栄誉を手にしたのであった。トップのガンナの平均時速は27.26キロ。近年のレースでは平均時速が40キロ前後というのがザラなので、それと比べてしまうとはるかに劣るものではあるが、当時のプリミティブな自転車で、2448キロもの悪路を走り切ったことを考えれば、驚異的な記録である。もし、今の選手が同じ条件で走らされたら、間違いなく膝や腰に痛みを訴えることだろう。



【不敵な面構えのガンナ選手】

最後に、勝者ガンナ選手による感動の(?)優勝コメントがこちら。

“L'impressione più viva l'è che me brüsa tanto l'cù!”

「(このレースで)一番の思い出は、ケツが焼けるほど痛かったことさ！」。

[参考資料]

『自転車の文化史』(佐野裕二,中公文庫,1987)

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)

Wikipedia.it 関連情報

(当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリア通信

第4回『リヴィエラ海岸へ』 “*il mare e la terra di Cinque Terre*”

深草 真由子

異常気象と言われるほど雨ばかりが続いた五月最後の週末、空模様を心配しながら、私はピサからリヴィエラ海岸へと向かっていた。以前ミラノへ行く途中でこの辺りを通過した時、トンネルとトンネルの間からほんの一瞬だけ見えた海に強く惹かれていた。「海」と一口に言っても、その印象は土地によって異なる。夕暮れの似合うヴェネツィアのどこかノスタルジックな海や、眩しい太陽とビーチパラソルが彩る南イタリアの海とは違って、カラフルでかわいい集落、海岸沿いの遊歩道—リヴィエラ海岸といえばヨーロッパ人が避暑に訪れるリゾート地。だから私もちょっとしたヴァカンス気分を味わいたいと電車に乗り込んだ。なにより「地元の漁師が捕った新鮮な海の幸と、おいしいジェノヴェーゼのパスタが食べられるに違いない」という期待で私の頭の中はいっぱいだった。

ラ・スペツィアを通過し、チンクエ・テッレの南端の村リオマッジョーレで電車を降りる。チンクエ・テッレとはリヴィエラ海岸沿いに点在する五つの村（南から順にリオマッジョーレ、マナローラ、コルニーリア、ヴェルナツツァ、モンテロッソ）の総称で、村と村を結ぶ道は海を望むハイキング・コースとなっている。断崖絶壁の上に立つ集落はもともと十一世紀に要塞として築かれたもので、それから約一千年もの間、周辺の地域から交通の遮断された「陸の孤島」であり、そのためもあってこの辺りでは独自の文化が生まれ、延々と継承されてきた。実際数キロしか離れていないにも関わらず、隣り合う村でも異なる方言が使われているといった具合である。

そんな「陸の孤島」で休日をゆっくり、のんびり過ごそうと思ってやって来たのに、リオマッジョーレの駅前の小さな広場は観光客でごった返していた。確かにここは有名な世界遺産の一つであるとはいえ、まだ五月だというのに、まさかこれだけ

の人が集まっているとは…。中には折り畳み傘を頭上に掲げたガイドに先導される団体客たちまでいる。チンクエ・テッレが思いの外観光地化されていた事実に、正直なところ少しがっかりしてしまった。リオマッジョーレとマナローラを結ぶ道は *Via dell' Amore* (愛の小道) と呼ばれており、静かでロマンチックな場所であろうと想像していたが、他の大勢の観光客と道を譲りあいながら散歩するというのが現実であった。1920年代、鉄道敷設工事の際に必要な弾薬庫が二つの村の間に設置され、それへのアクセスのために海沿いにこの道が作られた。景色が良いのはもちろんのこと、人気(ひとけ)がないということもあって、地元の恋人たちがこの場所を密会スポットとし始めたのが *Via dell' Amore* の名前の由来ということだ。



【マナローラの入り江】

三番目の村コルニーリアを過ぎると、なだらかな散歩道は終わり、海から遠く離れたかなり急な山道が始まる。さすがにここからは観光客もまばらになり、本当に「陸の孤島」から「陸の孤島」への移動を味わっているような気分になる。前日までの雨天とはうって変わって空は雲一つなく、屋下がりの強い日差しのせいもあって体はかなり疲労していたが、時々感じるさわやかな風を全身で受け、森林浴を満喫していると、モンターレがチンク

エ・テッレに所縁が深いことを思い出した。

詩人エウジェーニオ・モンターレは 1896 年、ジェノヴァで化学製品を輸入する会社を営む両親の下に生まれた。二十世紀前半の多くの作家や知識人たちとは異なり、彼は大学出のエリートではなかった。会計士の資格を取得して父親の会社を手伝い、声楽の才能があり、バリトン歌手になる夢も持っていた。ファシズムに与しない形で文学活動を続け、戦後はコッリエーレ・デッラ・セーラの編集者としても、ジャーナリストとしても活動した。代表的な作品としては詩集 *Ossi di seppia*, *Le occasioni*, *Bufera* などがある。1975 年にノーベル文学賞を受賞し、1981 年に八十五歳で亡くなった。モンターレは十歳の頃から、チンクエ・テッレの最も北に位置する村モンテロッソにある、家族が所有する別荘で夏の休暇を過ごした。チンクエ・テッレは詩人にとって、生涯を通しての「基点」であったと言っても良いだろう。1976 年に発表した *Sulla poesia* の中で、彼は若い頃を振り返り、次のように述べている。「東リグーリアー私が青春期の一時を過ごした地—、そこにはこの不毛で、生硬で、人を眩惑させるような美しさがある」。

モンターレが二十歳前後から書き始めた詩のアンソロジー *Ossi di seppia* 『烏賊の骨』(1925 年)では、夏のチンクエ・テッレの景観が重要なテーマとされている。もはや無邪気な少年時代を終え、大人として人生を歩み始めた頃、閉塞感漂う将来への不安を抱えながら、モンターレはこの地で何を感じていたのだろうか。生命感溢れる広大な海と不毛の大地、その間に立つ詩人。言及はされていないものの、ファシズムの台頭も詩人の沈鬱な心に一層暗い影を落としていたはずである。偉大な詩の伝統とは一線を画するというモンターレの詩学の一つのマニフェストでもある、『烏賊の骨』中の「レモン」(1921-2 年)で詠われたチンクエ・テッレのようすは、今でもそのまま残っているように思う。

鳥たちの鳴き声を空の青が飲み下して
消えてしまえばもっと良い。
そうすれば、ほとんど動きのない空気の中で
枝たちのささやきかもっとはっきり聞こえる。
この香りの感覚も、もっとはっきりと。
(『烏賊の骨』、「レモン」より)

詩人が沈黙の中で感じとったのはレモンの「香り」…地中海と言えばレモン。イタリアでレモンが栽培されると言っても当たり前のように思われるかもしれないが、実際はこの地に生きる人々の知恵と苦労の結晶である。平地がなく土地も痩せているチンクエ・テッレにおける農業は困難を極め、人々は長い年月をかけて急斜面の岩盤を砕いた石垣の上に畑を作り、そこで作物を栽培してきた。ここでは段々畑にレモンやブドウの木が栽培されているのをよく目にする。チンクエ・テッレのワインは有名で、十四世紀にはすでにポッカッチョが『デカメロン』第十日目第二話の中で言及している。「…こんがり焼いたパン二切れに、大きいグラスの“コルニーリアのヴェルナツツア”…」この辺りのブドウの木は常に海からの塩分を含んだ風にさらされ、実を多くつけない。そんなブドウから作られるシャクケトラという名の甘いワインは、大変貴重なものとして昔から貴族や王たちがそのワインをテーブルに置くことを大きな誇りと感じていたという記録が残っている。



【ヴェルナツツアと海、村はもうすぐ】

観光客で賑わっていたコルニーリアを離れて静かな山道を歩いている時、ちょうどモンターレが詠んだ静けさの中に自分があるような気がする。誰にも邪魔されることなく、日常生活の諸々の問題を忘れて、自然に身をまかせることの心地よさ、解放感。感覚を研ぎ澄ませてみると、遠くから波の音と潮の香りがこの山の中まで到達していることを発見する。海はすぐそばにある。それに誘われるかのように道を先に進む。山を登って、下って、やっと次の目的地ヴェルナツツアを見つけた時の達成感、感動はなんと表現し難い。岬の上

に作られた村、塔と教会、カラフルな家々、村を取り囲む海のブルー。

思い描いていたリヴィエラ海岸の優雅なヴァカンスも、おいしい魚介類も味わうことはなかった。だがその美しいパノラマが、一山超えた分のご褒美であった。

(元当館スタッフ)



【海岸線のすぐそばの小さな果樹園】

… 会館だより …

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田:大阪駅前第4ビル

7/4 (日) 13:00~14:30

7/4 (日) 15:00~16:30

7/6 (火) 19:00~20:30

● 四条烏丸:ウイングス京都

7/6 (火) 19:00~20:30

● 京都本校:日本イタリア京都会館

7/3 (土) 11:00~12:30

7/3 (土) 13:00~14:30

7/6 (火) 11:00~12:30

スペイン語 無料体験レッスン

7月開講の夏期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

日時:7/8 (木) 15:00~16:30

会場:日本イタリア京都会館 本校

講師:当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

7月開講の夏期語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

日時:7/8 (木) 19:00~20:30

会場:日本イタリア京都会館 本校

講師:当館ポルトガル語講師

イタリア語検定 直前講習会

10月3日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項や日本人がひっかけやすいポイントを懇切丁寧に指導します。

・日時:

内容・時間は京都・大阪いずれも同じ

大阪 9月12日(日)

京都 9月19日(日)

①5級向け:10:30~12:00

②4級向け:13:00~14:30

③3級向け:15:00~16:30

④3級作文模試:16:30~17:00

・費用:2科目 一般・受講生 3,000円

維持会員 1,500円

1科目 一般・受講生 2,000円

維持会員 1,000円

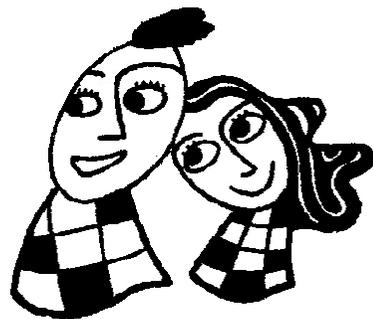
※3級作文模試は別途1,000円で、

3級向け対策受講者のみオプションとして受講可

・会場:日本イタリア京都会館 本校

同 大阪梅田校

・講師:杉 栄子(当館イタリア語講師)



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>